

第105回日商簿記3級 第1問 仕訳問題類題 問題

次の各取引について仕訳しなさい。ただし、勘定科目は次の中から最も適切と思われるものを選ぶこと。

損	益	消	耗	品	費	発	送	費	現	金
固定資産売却損	売	上	仮	受	金	未	収	入	金	
売掛金	前	受	金	当	座	預	金	車	両	運
前払金	通	信	費	資	本	金	受	取	手	形
買掛金	仕	入	車	両	運	搬	具	減	価	償
雑損	当	座	借	越	固	定	資	産	売	却
仮払金	益	未	払	金						

1. 笠原商店から商品 ¥ 300,000 を仕入れ、代金は小切手を振り出して支払った。ただし、当座預金の残高は ¥ 200,000 であったが、宇野銀行と当座借越契約を結んでおり、借越限度額は ¥ 400,000 である。なお、引取運賃 ¥ 10,000 は現金で支払った。
2. 営業用の小型自動車（取得原価：¥ 2,000,000、残存価額：取得原価の10%、耐用年数：4年）を3年間使用し、すでに3期（決算：年1回）にわたって減価償却をしてきたが、この自動車を ¥ 300,000 で売却し、代金は月末に受け取ることにした。ただし、減価償却費の計算は定額法、記帳は間接法を用いている。
3. 月末に、会計係は、小口現金係から本月分の小口現金の支払高について、次のとおり報告を受けたので、ただちに、小切手を振り出して資金の補給をした。ただし、定額資金前渡法を採用している。
 - ・通信費：¥ 40,000
 - ・消耗品費：¥ 20,000
4. 孫商店に商品 ¥ 300,000 を売り渡し、代金は内金 ¥ 50,000 を差し引き、残額は同店振出しの約束手形で受け取った。なお、発送のための諸費用（当店負担） ¥ 10,000 は現金で支払った。
5. 損益勘定の記録によると当期の収益総額は ¥ 300,000 で、費用総額は ¥ 200,000 であった。この差額を資本金勘定に振り替えた。

・解答

	借方科目	金額	貸方科目	金額
1	仕 入	310,000	当 座 預 金	200,000
			当 座 借 越	100,000
			現 金	10,000
2	車両運搬具減価償却累計額	1,350,000	車 両 運 搬 具	2,000,000
	未 収 入 金	300,000		
	固 定 資 産 売 却 損	350,000		
3	通 信 費	40,000	当 座 預 金	60,000
	消 耗 品 費	20,000		
4	前 受 金	50,000	売 上	300,000
	受 取 手 形	250,000		
	発 送 費	10,000		
5	損 益	100,000	資 本 金	100,000

・解説

1. 仕入取引・当座取引に関する問題です。

本問は【当座に関する仕訳】と【引取運賃に関する仕訳】に分けて考えると分かりやすいです。

【当座に関する仕訳】

当座取引の処理に関しては、【当座預金勘定と当座借越勘定を使う 2 勘定制】と【当座勘定のみを使う 1 勘定制】の 2 つがありますが、この分野は簿記 3 級の頻出論点なので、どちらの処理も必ず押さえておきましょう。

本問は、問題に列挙されている勘定科目に**当座預金・当座借越勘定がある（当座勘定がない）**ので、2 勘定制で処理すると判断します。

■当座預金勘定と当座借越勘定を使う 2 勘定制（解答）

当座を増加させるような取引（商品の売上や有価証券の売却など）の場合は、まず当座借越があるか確認します。当座借越があればそれを相殺したうえで残りを当座預金勘定に計上し、ない場合は全額をそのまま当座預金勘定に計上します。

逆に、当座を減少させるような取引（商品の仕入や有価証券の購入など）の場合は、まず当座預金の残高があるか確認します。当座預金の残高があればそれをゼロになるまで減額したうえで残りを当座借越勘定に計上し、ない場合は全額をそのまま当座借越勘定に計上します。

本問は、問題文に「**当座預金の残高は ¥ 200,000 であった**」とあるので、まずは当座預金勘定を減額し、それでも足りない 100,000 円（=300,000 円−200,000 円）を当座借越勘定で処理します。

★当座預金勘定と当座借越勘定を使う 2 勘定制の仕訳…①

(借) 仕入 300,000 / (貸) 当座預金 200,000
(貸) 当座借越 100,000

■当座勘定のみを使う1勘定制（参考）

参考までに1勘定制による場合の仕訳も確認しておきましょう。当座に関する仕訳は全て「当座勘定」を使って機械的に処理するだけなので2勘定制よりも簡単です。

☆当座勘定のみを使う1勘定制の仕訳（参考）

（借）仕入 300,000 / （貸）当座 300,000

■引取運賃に関する仕訳

引取運賃などの付随費用は、商品を仕入れるさいに不可避免的に発生する費用なので、仕訳を切るさいは**仕入勘定に含めて処理**します。

商品の仕入原価（310,000円）＝購入代価（300,000円）＋付随費用（10,000円）

★引取運賃に関する仕訳…②

（借）仕入 10,000 / （貸）現金 10,000

以上、①②をまとめると解答仕訳になります。

当座取引に関する問題は、第100回の間2や第103回の間5、第104回の間2、第114回の間5、第121回の間5、第122回の間2、第125回の間5、第129回の間1、第133回の間1、第134回の間3、第135回の間5、第136回の間5、第137回の間1でも出題されているので、あわせてご確認ください。

2. 固定資産の売却・未収入金に関する問題です。

固定資産は期首に売却する場合と、期中（または期末）に売却する場合とで処理が異なるので、まず問題がどちらに該当するのか確認しましょう。

■期首に固定資産を売却する場合

当期の**減価償却費はゼロ**なので、取得原価から期首備品減価償却累計額を差し引いて売却時の帳簿価額を計算し、さらに売却価額との差額で売却損益を計算します。

売却時の帳簿価額＝取得原価－期首備品減価償却累計額

■期中（または期末）に固定資産を売却する場合

当期の減価償却の処理に関する指示が入るので、それによって当期の減価償却費を（月割で）計算します。そのうえで、取得原価から期首備品減価償却累計額&当期の減価償却費を差し引いて売却時の帳簿価額を計算し、さらに売却価額との差額で売却損益を計算します。

売却時の帳簿価額＝取得原価－期首備品減価償却累計額－当期の減価償却費

■本問はどちら？

本問は売却日に関する情報がなく、また当期の減価償却に関する指示もないため、**期首に売却したと仮定**して仕訳を考えます。まずは期首車両運搬具減価償却累計額を計算しましょう。

$$2,000,000 \text{ 円} \times 90\% \div 4 \text{ 年} = 450,000 \text{ 円} / \text{年}$$

$$450,000 \text{ 円} / \text{年} \times 3 \text{ 年} = 1,350,000 \text{ 円}$$

期首車両運搬具減価償却累計額の金額を計算したら、取得原価からこれを差し引いて売却時の帳簿価額を計算します。

$$\text{取得原価 } 2,000,000 \text{ 円} - \text{期首車両運搬具減価償却累計額 } 1,350,000 \text{ 円} = \text{売却時の帳簿価額 } 650,000 \text{ 円}$$

最後に、売却時の帳簿価額と売却価額との差額で売却損益を計算します。売却価額 300,000 円は商品売買以外の取引で発生した債権なので、売掛金ではなく未収入金で処理します。

- ・売却時の帳簿価額 = 650,000 円
- ・売却価額 = 300,000 円
- ・差額 = 350,000 円 (帳簿価額 > 売却価額…売却損)

★解答仕訳

(借) 車両運搬具減価償却累計額 1,350,000 / (貸) 車両運搬具 2,000,000
(借) 未収入金 300,000
(借) 固定資産売却損 350,000

固定資産の売却に関する問題は、第 102 回の問 2や第 108 回の問 1、第 115 回の問 4、第 119 回の問 5、第 120 回の問 3、第 122 回の問 5、第 132 回の問 2、第 134 回の問 1、第 135 回の問 3、第 136 回の問 2、第 137 回の問 3、第 138 回の問 2、第 142 回の問 1、第 146 回の問 2、第 149 回の問 5でも出題されているので、あわせてご確認ください。

3. 小口現金に関する問題です。

【支払いに関する仕訳】と【補給に関する仕訳】に分けて考えましょう。

■支払いに関する仕訳

小口現金から支払った経費を計上します。仕訳自体は簡単なので特に問題ないと思います。

★解答仕訳①

(借) 通信費 40,000 / (貸) 小口現金 60,000
(借) 消耗品費 20,000

■補給に関する仕訳

問題文に「ただちに、小切手を振り出して資金の補給をした。ただし、定額資金前渡法を採用している。」とあるので、支払額合計 60,000 円と同額の小切手を振り出して小口現金を補給します。

★解答仕訳②

(借) 小口現金 60,000 / (貸) 当座預金 60,000

以上、①②をまとめると解答仕訳になります。

なお、本問は問題文に列挙されている勘定科目に「小口現金」がないので、借方と貸方の小口現金勘定は相殺しません。

小口現金に関する問題は、第103回の間2や第112回の間4、第113回の間5、第121回の間4、第126回の間2でも出題されているので、あわせてご確認ください。いずれの問題もほとんど同じ形式で出題されています。

4. 売上取引に関する問題です。

このような問題は【前受金に関する取引】【約束手形に関する取引】【発送運賃に関する取引】の3つに分けて考えると、難易度がぐっと下がって分かりやすくなります。

【前受金に関する取引】

問題文に「代金は内金 50,000を差し引き」とあるので、売上に先立って内金を受け取っていたことが分かります。

☆内金受取時の仕訳

(借) 現金など 50,000 / (貸) 前受金 50,000

★解答①

(借) 前受金 50,000 / (貸) 売上 50,000

なお、本試験では「内金」の部分が「手付金」として出題されることもありますが、受験簿記上では両者の性格の違いを正確に把握する必要はありませんので、どちらも前受金勘定を使って機械的に処理してください。

【約束手形に関する取引】

問題文に「残額は同店振出しの約束手形で受け取った」とあるので、他店振出しの約束手形の受け取り、つまり受取手形の増加として処理します。この取引に関しては簡単なので特に問題はないと思います。

★解答②

(借) 受取手形 300,000 / (貸) 売上 300,000

【発送運賃に関する取引】

問題文の「発送のための諸費用(当店負担) 10,000は現金で支払った」から、当該発送運賃が当店負担であることが分かるので、発送費などの勘定科目を使って費用処理します。なお、先方負担の場合は仕訳が異なるので、あわせて押さえておいてください。

★解答③

(借) 発送費 10,000 / (貸) 現金 10,000

☆参考・先方負担で、売上債権である売掛金勘定に含めて処理する方法

(借) 売掛金 10,000 / (貸) 現金 10,000

☆参考・先方負担で、立替金勘定を使って売上債権である売掛金とは別にして処理する方法

(借) 立替金 10,000 / (貸) 現金 10,000

先方負担の場合、どちらによるかは必ず問題文に指示があるので見落とさないように気をつけてください。まれに問題文に指示がない場合もありますが、その場合は許容勘定群や解答用紙などにヒントが隠れているので、慌てずに落ち着いて対処してください。

以上、①②③をまとめると解答仕訳になります。

本問はやや難易度の高い問題なので、間違えてしまった方も多いと思いますが、ひとつひとつに分解して考えれば十分正解にたどりつける問題です。

5. 損益の振り替え（決算振替仕訳）に関する問題です。

問題文の「**損益勘定の記録によると当期の収益総額は ¥ 300,000 で、費用総額は ¥ 200,000 であった**」から、以前に以下の2本の仕訳を切っていたことが分かります。

☆参考：収益と費用を損益に振り替える仕訳

(借) 諸収益 300,000 / (貸) 損益 300,000

(借) 損益 200,000 / (貸) 諸費用 200,000

この2本の仕訳の結果、損益勘定が**100,000円の貸方残になる**ので、同額を資本金勘定に振り替えます。

★解答の仕訳

(借) 損益 100,000 / (貸) 資本金 100,000

損益の振り替えに関しては、以下のような流れで機械的に、サクッと処理することもできます。参考までにご確認ください。

- ・収益総額 > 費用総額 → **利益**が発生 → 資本金が**増える** → 資本金が**貸方** → 損益が**借方**
- ・収益総額 < 費用総額 → **損失**が発生 → 資本金が**減る** → 資本金が**借方** → 損益が**貸方**

損益の振り替えに関する問題は、第107回の間5や第125回の間4、第133回の間5、第150回の間2でも出題されているので、あわせてご確認ください。